子育て情報（園長先生の子育てひろば）

令和２年９月
椙山女学園大学附属幼稚園

ケ・セラ・セラ

園長　山中　文

新型コロナウィルス感染症が問題になってから、もう半年が過ぎました。歴史に残るトピックとなってしまうでしょうか。

半年という期間は、発達の著しい幼児期の教育にとっては、とても大きいものです。

東北大震災の際、幼児の教育は震災そのものだけでなく、震災後にわたって多くの影響を受けました。東北のある市の幼稚園児の１年間の体重増加は、震災前が 3.1kg であったのに対して、震災後放射能を避けるために外遊びが禁じられた後には、平均でわずか 0.8kg になったそうです。それは、外遊びがなかったための食欲不振といった単純なことが原因ではなく、本来の子どもらしい活動が減少して子どもの心身の発達に生じた、複合的な問題のためではないかと言われています。また、震災後寄せられたボランティアによる企画（アーティストやスポーツ選手の訪問や、関連施設へのお出かけ保育等）は、子どもたちを勇気づけた一方で、過覚醒の状態をもたらし、それが多くなるにつれ、日常の保育のリズムを狂わせることにもなったそうです。保育者側も、そういった企画型保育に慣れ、本来の保育にもどる意識がなかなかできなかったと聞いています[1]。

事情は異なりますが、今この時期も、日常の保育と異なる状況が長く続いています。感染対策における休業要請により集団生活が減少しましたし、再開してからも、マスクや間隔の制限があり、大きな声で触れ合ったり、友だちとつながる遊びをしたりすることができにくい状況にあります。

こんな時期にできることは何でしょう。できるだけ、子どもらしい日常の時間をつくることかと思います。たとえば、「IPA（International Play Association:子どもの遊ぶ権利のための国際協会）」からは、『危機的状況における遊び 子どものくらしに関わる人のためのガイド』[2]が出されています。これには、大人が子どもの遊びをじゃましないこと、大人が遊びに参加する場合のこと、はちゃめちゃな遊びをする場合のこと、遊べるアイテム、外での簡単な遊び、子どもとの接触することなどについて、具体的に書かれています。

愛知県の緊急事態制限はひとまず解けましたが、まだまだ事態は深刻ですし、加えて残暑も厳しいこの頃です。取れる対策には充分に配慮しながらも、子どもの遊びを見たり手伝ったり（？）する時はケ・セラ・セラでいきたいものです。

1　日本保育学会『震災を生きる子どもと保育』（日本保育学会災害時における保育問題検討委員会報告書、2013 年）および、福島市内の幼稚園園長談話より

2　https://www.ipajapan.org/playincrisis（2020/08/26 参照）